自分の考えを持ち、表現できる社会科授業づくり

－相互尊重を基盤にした言語活動を通して－

教職実践基礎領域
飯田　康太

【要　旨】

連携協力校の配属学級の子どもたちは、学級内に自分の居場所があり、充実した学校生活を送っている。しかし、質問紙調査や観察から、社会科学習で考えることや表現することに苦手意識を持っていることが分かった。このことを改善するために、言語活動を通して、自分の考えを持ち、表現できる子どもを育成していきたいと考えた。しかし、言語活動の成立には、子ども同士の間に互いの意見を伝え合える豊かな人間関係が基盤にあるべきだと考えた。

まず、実習Ⅰでは、子ども同士の間に互いの意見を伝え合える豊かな関係を形成するために、子どもたち一人ひとりに自分も相手も尊重する力の育成を図った。そのような力の育成を図ったことで、言語活動において、話す・聞く姿が見られるようになった。

次に、実習Ⅱでは、実習Ⅰで培った豊かな人間関係を基盤に社会科学習の言語活動を通して、子どもたち一人ひとりに思考力（・判断力）と表現力の育成を図った。そのような力の育成を図ったことで、子どもたちは、活動の中で、「わかった」「できた」などの成功感を味わい、考え及び表現する意欲が高まった。

Ⅰ　主題設定の理由

1.　今日的教育課題から

知識基盤型社会と言われる現代社会を生き抜く能力として、「生きる力」が求められている。この「生きる力」は、「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の３つの要素から成り立っている。その中の「確かな学力」は、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」と定義されている(文部科学省 2008)。

このような考え方をもとに、現代を生きる子どもたちには、思考力・判断力・表現力などを育むと共に、考え及び表現するなどの主体的に学習に取り組む意欲も養うことが求められていると考えた。

2.　社会科の学習指導要領から

小学校学習指導要領解説社会編(2008)には、「社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得し、それらを活用する力や課題を探究する力を身に付けていくために、各学校段階の特質に応じて、習得すべき知識、概念や技能を明確にするとともに、各種の資料を効果的に活用し、社会的事象の意味などを解釈したり事象の特色や事象間の関連を説明したりするなどの言語活動を重視する」と述べられている。このように、活用する力や課題を探究する力、即ち、思考力・判断力・表現力などの習得のために言語活動は重要な役割として位置付けられる(山口 2011)。

3.　子どもの実態から

(1)　社会科学習の観察から

５月下旬頃、連携協力校の配属学級３年Ａ組の子どもたち(男子 15 名・女子 12 名・計 27 名)は、社会的事象に関する知識を意欲的に習得している姿が見られた。

しかし、知識を蓄えることはできていたが、それらを活用し、課題解決に向けて、考えることや相手に伝えることに苦手意識を持っている姿が見られた。

したがって、社会科学習の言語活動を通して、思考力・判断力・表現力の習得を図り、活動の中で、「わかった」「できた」などの成功感を味わわせ、考え及び表現する意欲を高めていくことが求められると考えた。

(2)　言語活動の観察から

６月上旬頃、３年Ａ組の子どもたちに hyper-QU（図書文化社）を実施した。この結果から、本学級の 69％の子どもたちは、学級生活満足群に属していることが分かった(全国平均 41％)。つまり、過半数の子どもたちは、学級内に自分の居場所があり、充実した学校生活を送っている。しかし、言語活動の様子を観察すると、一部の子どもたちに自分の意見を話すことができず、仲間の意見に安易に同調する姿や一方的に自分の意見を発言し仲間の意見を聞かない姿が見られた。そのため、思考力・判断力・表現力を育成する前に、まず、子どもたちが、自分の意見を安心して話したり、仲間の意見を聞いたりできるような互いを尊重する人間関係の形成が求められると考えた。

4.　研究主題のまとめ

課題解決に向けて、既習の知識を生かし、自分の考えを持ち、表現できるようになるためには、社会科学習で言語活動を実践していくべきであると考える。しかし、子ども同士の間に豊かな人間関係が形成されていないと、自分の意見を話したり、仲間の意見を聞いたりする言語活動は成立しない。そのため、まず、子どもたち一人ひとりに自分と仲間を尊重する力を育成し、子ども同士の人間関係を豊かにしていきたい。次に、社会科学習で、豊かな人間関係を基盤に言語活動を取り入れ、思考力・判断力・表現力を育成していきたい。そのような力の習得を図ることで、子どもたちは、活動の中で、「わかった」「できた」などの成功感

を味わい、考える及び表現する意欲が高まると考える。

したがって、本研究の主題を、「自分の考えを持ち、表現できる社会科授業づくりー相互尊重を基盤にした言語活動を通してー」と設定した。

以下では、言語活動の基盤となる豊かな人間関係について相互尊重を軸に、また、社会科における思考力・判断力・表現力について論じる（Ⅱ章）。それらの力を育成するための手立てについて論じる（Ⅲ章）。

Ⅱ　研究の目標

1.　目指す子ども像

本研究では、自分の考えを持ち、表現できる子どもを育てていきたい。そのためには、まず、言語活動を成立させるための豊かな人間関係の形成をする。豊かな人間関係を形成するために、子どもたち一人ひとりに自他尊重力を育成する。このような働きかけによって、言語活動において、自分の意見を話す姿と仲間の意見を聞く姿が見られると考える。次に、言語活動を通して、思考力・判断力・表現力の習得を図り、活動の中で、「わかった」「できた」などの成功感を味わわせ、考える及び表現する意欲を高める。このような働きかけによって、自分の考えを持ち、表現できる子どもに近づくと考える。そこで、目指す子ども像とその具体的な姿を以下のように定める。

【目指す子ども像】

自分の考えを持ち、表現できる子ども

【具体的な目指す子どもの姿】

・言語活動において、自分の意見を話すことと仲間の意見を聞くことができる姿…「話す・聞く」

・思考力・判断力・表現力を確実に身に付け、これらの力を生かして、課題解決に向けて、自分から進んで取り組む姿…「思考力・判断力・表現力の習得」「考え及び表現する意欲」

以下では、研究の目標について、実習Ⅰと実習Ⅱのそれぞれの研究目標について順に述べる。

2.　実習Ⅰの研究目標

(1)　豊かな人間関係の必要性

西川（2004）は、教室における話し合いの現状を調査するために子ども同士の対話分析を実施した。その結果、話し合い活動では、仲間の意見を強制的に排除ないし無視するケースや意見の対立を避け、安易に同意するケースなどが見られた。西川(2004)は、このようなケースが生じる原因として、子ども同士の人間関係が影響を与えていると指摘する。例えば、「主従関係があり、友人関係がない班はすべて、学力上位の子が他の子の経験を強制的に排除ないし無視するケースとなった」と述べる(西川 2004)。

このことから、言語活動の成立には、子ども同士の間に豊かな人間関係が築かれているべきだと考えた。

(2)　言語活動の基盤としての豊かな人間関係とは

言語活動において、自分の意見を話す姿と相手の意見を聞く姿の実現には、子ども同士の間に豊かな人間関係が、築かれているべきである。そして、このような関係を形成するためには、子どもたち一人ひとりに自己尊重力と他者尊重力を育むことが必要である。

野口（1994）は、子どもにとって話しやすいか否かは、子ども同士の人間関係が関わっているとして、学級の中に友だちの失敗をあたたかく認め合える風土が必要であると述べる。

また、菊池（2015）は、話し合いに参加する一人ひとりが自分の意見を持ち、意見を出し合い、聴き合うことによってより良い考えが生まれると述べる。

そこで、これらの考え方をもとに、言語活動の成立には、子ども同士の間に豊かな人間関係が必要であると考え、本研究における豊かな人間関係を以下のように定義付けた。

【豊かな人間関係の定義】

自他の立場や意見を尊重し、互いの考えを伝え合える関係

このような豊かな人間関係を形成するためには、子どもたち一人ひとりに自己尊重力と他者尊重力を育むべきであると考えた。この考えは、交流分析の「OK 牧場」という理論を参考にしたものである(図 1)。「OK 牧場」とは、対人関係において人が取り得る 4 つの考え方・態度を示している(小柳ら 2009)。人は、相手とのコミュニケーションの中で、無意識に自分や相手のことを肯定的や否定的に捉えている。例えば、「自分はＯＫ（自己肯定）だけど、私にとって、相手はＮＯＴ－ＯＫ（他者否定）」と捉えると、図 1 の中の排他主義に属しやすく、相手とのコニュニケーションの中で、自分の意見は発言するが、人の話を聞かない状態に陥りやすい。この 4 つの中で目指すべき立場は、「自他の調和・共存」という自分も相手も尊重する立場である。

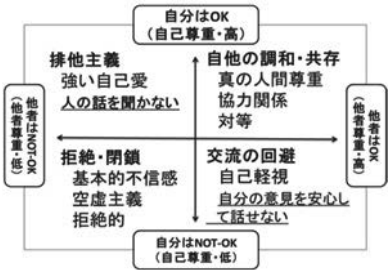

図 1　基本的な構えと交流様式

（杉田ら 1994；小柳ら 2009 を参照）

そこで、このような考え方をもとに、言語活動の基盤となる自他の立場や意見を尊重し、互いの考えを伝え合える豊かな人間関係を形成するためには、子どもたち一人ひとりに自分も相手も尊重できる力を育むことが必要であると考えた。そして、本研究における自他尊重力について以下のように定義付けた。

自己尊重力の定義	他者尊重力の定義
自分の良さに気付き、自分に自信を持つことができる力である。このような力を育成することで、自分の意見を積極的に話すことができる。	仲間の良さに気付き、仲間の事を理解しようとする力である。このような力を育成することで、仲間の意見を聞くことができる。

(3)　自己尊重力と他者尊重力の育成について

ア.　自分と仲間の良さに気付く活動

自分の良さに気付けないと自分を尊重する気持ちが低くなり、自分の意見を話さなくなってしまうと考える。また、仲間の良さに気付けないと他者を尊重する気持ちが低くなり、仲間の意見を聞かなくなってしまうと考える。

そこで、このような考え方をもとに、自他尊重力を育むためには、自分と相手の良さに気付く活動を実践する必要があると考えた。

イ.　自他を尊重した伝え方を理解する活動

自分の意見を伝える力が無いと自分の意見を相手に伝えることができない。このような経験が積み重なることで、自己を尊重する気持ちが低くなり、自分の意見を話さなくなってしまうと考える。また、相手を傷つける攻撃的な伝え方であると、仲間とのトラブルが起きやすくなる。このような経験が積み重なることで、仲間を尊重する気持ちが低くなり、相手の意見を聞かなくなってしまうと考える。

そこで、このような考え方をもとに、自他尊重力を育むためには、自他を尊重した伝え方を理解する活動を実践する必要があると考えた。

3.　実習Ⅱの研究目標

(1)　考える及び表現する意欲を高めるためには

辰野（2009）は、学習意欲を高めるためには、子どもたちに興味を湧かせたり、成功感を味わわせたりすることが大切であると述べる。そこで、興味を抱かせる方策の１つとして、「技能を伸ばす」ことの必要性を述べている。辰野（2009）は、「知能の増加に伴って興味が増すと同じく、技能においても、その上達につれて興味が増します」と述べる。また、算数科を例に、「計算が速く正確にできるようになると、算数に対する興味が増します」とも述べている(辰野 2009)。

このような考え方をもとに、子どもたちは、学習課題に対してわかったり、できたりすると、今度は、自分から進んで取り組むようになると考えた。

そこで、子どもたち一人ひとりに課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を習得させることが大切であると考えた。このような力の習得を図ることで、活動の中で、「わかった」「できた」という成功感を味わい、子どもたちの考え及び表現する意欲が高まると考えた。そのため、実習Ⅱでは、子どもたち一人ひとりに思考力・判断力・表現力の習得を目指す。

(2)　社会的な思考力(・判断力)と表現力とは

ア.　社会的な思考力(・判断力)について

澤井(2012)によると、「判断」は、広くは思考の中に含まれ、選択、意思決定などとされている。

したがって、思考と判断は分けて考えづらく、判断力は、思考力の中に含まれるという考えが多いことが分かった。このような考えから、以下の本文では、思考力(・判断力)と表記する。

岩田(1995)によると、考えるとは、いろいろな知識や情報の間にどんな関係が成り立つかを見付けることである。

また、小学校学習指導要領解説社会編(2008)によると、本研究対象である小学校第３学年に求められる社会的な思考力や判断力とは、「地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力」である。

これらの考えをもとに、本研究における社会的な思考力(・判断力)を以下のように定義付けた。

【社会的な思考力(・判断力)の定義】

社会的事象に関する知識を関連付けて考えるなどを通して、自分の意見を持つことができる力である。

イ.　社会的な表現力について

加藤(2013)よると、表現力とは、思考や感情などの内的な営みを、言語等を通して他に伝える能力である。

また、小学校学習指導要領解説社会編(2008)によると、小学校第３学年に求められる社会的な表現力とは、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて調べたことや考えたことを相手にも分かるように表現する力である。

これらの考えをもとに、本研究における社会的な表現力を以下のように定義付けた。

【社会的な表現力の定義】

調べたことや考えたことを相手にも分かるように伝える力である。

(3)　思考力(・判断力)と表現力の育成について

学習指導要領では、「知識・技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのもすべて言語によって行われる」ことを踏まえ、すべての教科等において、言語活動の充実を求めている(文部科学省 2008)。

また、中央教育審議会(2008)によると、思考力・判断力・表現力を育むためには、以下のような言語活動が重要であると述べている。

① 体験から感じ取ったことを表現する。
② 事実を正確に理解し伝達する。
③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
④ 情報を分析・評価し、論述する。
⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

そこで、本研究における社会的な思考力(・判断力)と表現力を育むために中央教育審議会(2008)が示す言語活動の中の３つの活動(波線)を実践する。

Ⅲ　研究の仮説

1.　研究の手立て

子どもの能力を育てるために学習活動を行う。その

際に7種の手立てを用意した(表1)。

表 1 能力の育成に向けた手立てのまとめ

	能力	学習活動		手立て
実習Ⅰ	自己尊重力・他者尊重力	自他を尊重した伝え方を理解する活動		①アサーショントレーニング
		自分と仲間の良さに気付く活動		②発問の工夫 ③いいところ見つけ
実習Ⅱ	思考力(・判断力)と表現力	言語活動	互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる活動	④たぶん ⑤話し合い
			事実を正確に理解し伝達する活動	⑥クラゲチャート
			情報を分析・評価し、論述する活動	⑦新聞づくり

2. 手立ての仮説

(1) 実習Ⅰ：自他を尊重した伝え方を理解する活動

手立て① アサーショントレーニング

自己表現の仕方によって、聞き手の受け取り方に違いが生じることに気付かせた上で自分と相手が共に肯定的な気持ちになる話し方を練習させる。そのことで、自分も相手も尊重する自己表現（アサーティブな自己表現）について理解できると考える。

(2) 実習Ⅰ：自分と仲間の良さに気付く活動

手立て② 発問の工夫-今までの生活を振り返る-

仲間に励ましてもらった出来事(運動会など)を想起させて、その時の気持ちを考えさせる。そのことで、仲間に支えられて生活している事に気付き、仲間を尊重する気持ちが育まれると考える。

手立て③ いいところ見つけ

仲間のいいところ見つけをさせる。この活動では、仲間の良さだけではなく、自分の良さにも気付ける。そのため、自他を尊重する気持ちが育まれると考える。

(3) 実習Ⅱ：互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる活動

手立て④ たぶん(予想を立てる)

本時では、予想を2回立てさせる。1回目の予想では、玉葱の値段を考えさせる。そのことで、商品に対する「安さ」という言葉の意味を理解できるだけでなく、予想を立てる楽しさを実感ができると考える。2回目の予想では、「たぶん」というキーワードを理解させる。そのことで、あくまでも予想と考えて、積極的に自分の意見を発言できると考える。

手立て⑤ 話し合い

10種の学習課題「お客さんの願い（例：商品がすぐに見つかるようにしてほしい)」の解決に向けて、仲間と共に考え判断し、話し合うことで学習課題を解決させる。そのことで、消費者の願いと販売者の工夫を関連付けて考え合う姿が見られると考える。また、仲間と協同的に課題解決をさせることで、一人では解決するのが困難な課題でも解決できると考える。そのことで、仲間と共に成功感を味わうことができると考える。

(4) 実習Ⅱ：事実を正確に理解し伝達する活動

手立て⑥ クラゲチャート

本時に行う買い物体験では、店員さん役の仲間が、お客さんが買い物をしやすいように工夫をしている事実を正確に付箋に書かせる。その後、クラゲチャートに、書いた付箋を貼って、教室に掲示する。そのことで、活動の中で気が付かなかった視点に気付けると考える。また、子どもの学習の成果を掲示することで、子どもたち一人ひとりの意見が大切に共有される為、表現する意欲の向上に繋がると考える。

(5) 実習Ⅱ：情報を分析・評価し、論述する活動

手立て⑦ 新聞づくり

今までの学習の成果を新聞にまとめさせる。新聞づくりでは、文字だけではなく、絵やクイズなどを書いても良いことを伝える。そのことで、自分の得意なこと（絵を書くことなど）を生かして、相手にも分かりやすく学習の成果を伝える姿が見られると考える。

3. 研究の仮説

仮説 A	自分と仲間の良さに気付き、自他を尊重した伝え方を理解することで、言語活動において、相手の意見を聞き、自分の意見を話す子どもの姿に近づくだろう。
仮説 B	社会科において、言語活動をすることによって、思考力(・判断力)と表現力が身に付くだろう。
仮説 C	思考力(・判断力)と表現力の習得を図ることで、考える及び表現する意欲が高まり、自分の考えを持ち、表現できる子どもの姿に近づくだろう。

Ⅳ 研究の構想図

教職大学院の教師力向上実習Ⅰ・Ⅱで手立てを実践する。研究構想図は以下のとおりである(図2)。

図 2 研究構想図

Ⅴ　指導の実際と考察

1.　教師力向上実習Ⅰにおける実践

(1)　実習Ⅰの概要

期間：2016年5月30日(月)～2016年6月24日(金)
学年：小学校第3学年(男15人・女12人　計27人)
授業：道徳、特別活動

(2)　実習Ⅰ前の子どもの実態

本学級の子どもたちは、休み時間になると仲間と仲良く遊んでいる。また、困っている仲間がいると助け合ったり、励まし合ったりすることができる。しかし、言語活動の中では、自分の意見を話すことができず、仲間の意見に安易に同調する姿と一方的に自分の意見を発言し仲間の意見を聞かない姿が見られた。

そのため、実習Ⅰでは、3 種の手立てで自他尊重力を育成し、その気になる姿の改善を目指す。

【実習Ⅰの気になる子どもの姿】

実態 A　自分の意見を話すことができず、仲間の意見に安易に同調する子ども

実態 B　一方的に自分の意見を発言し、仲間の意見を聞かない子ども

(3)　実習Ⅰにおける目指す子ども像

(2) で述べた実態があるため、実習Ⅰにおける目指す子ども像とその具体的な姿を以下のとおりに示す。

【実習Ⅰにおける目指す子ども像】

仲間の意見を聞き、自分の意見を話す子ども

【具体的な目指す子どもの姿】

言語活動において、自分の意見を話すことと仲間の意見を聞くことができる姿…「話す・聞く」

(4)　実践の計画

実習Ⅰの指導計画は以下のとおりである(表 2)。

表 2　道徳・特別活動の指導計画

「主題名」・学習内容	手立て	ねらい
ア.　道徳「ドッジボール」 資料「ドッジボール」で、登場人物の気持ちを考えて、励まし合う大切さを理解する。また、日常生活で、周りの人に励ましてもらった体験(本校の運動会など)を思い出し、人に支えられて生活していることに気付く。	手立て② (発問の工夫)	他者尊重
イ.　特別活動「目指せ!!話し方名人!!」 普段の言い方を見直し、自分と相手が共に肯定的な気持ちになる表現の仕方について、体験的に理解する。	手立て① (アサーショントレーニング)	自己尊重 他者尊重
ウ.　道徳「わたしのいいところ」 絵本「ええところ」でいいところを見付けた方と見付けてもらった方も、互いが肯定的な気持ちになることに気付く。また、仲間のいいところを探し、そのいいところを相手に伝え合う活動を通して、自他の良さに気付き、互いを尊重する気持ちを高める。	手立て③ (いいところ見つけ)	自己尊重 他者尊重

(5)　実践の実際

ア.　道徳「ドッジボール」　手立て②

周りの人に励ましてもらった体験を想起させて、その時の気持ちを考えさせた。過半数の子どもたちは、数日前に行われた本校の運動会の様子を想起し、周りの人に励ましてもらった体験やその時の気持ちを考えた。また、数人の子どもたちは、運動会だけではなく、授業の中で仲間に励ましてもらって、肯定的な気持ちになれたことも振り返った。授業に参加した 64.0%の子どもたちは、授業の感想用紙に、「仲間を大切にしていきたい」などと他者尊重に関わる感想を書いた。

イ.　特別活動「目指せ!!話し方名人!!」　手立て①

最初に、ある場面を理解させて、もし、自分が、登場人物Ａなら登場人物Ｂにどんな言い方をするのか考えさせた(「…」の部分)。

ある日、登場人物Ｂと遊ぶ約束をした登場人物Ａは、待ち合わせの場所でずっと待っていた。しかし、登場人物Ｂは、待ち合わせの場所に現れず、連絡もくれなかった。

次の日、学校で登場人物Ｂが、登場人物Ａに「ねえ、今日の学校が終わったら遊べる?」と言った。その時、登場人物Ａは、習い事があるから、登場人物Ｂの誘いを断ることを心の中で決めた。

登場人物Ａは、登場人物Ｂに「・・・・・・・・・・・」と言った。

次に、攻撃的な自己表現と非主張的な自己表現、アサーティブな自己表現について理解させて、前の活動で考えた言い方は、どの自己表現に該当するのか考えさせて、普段の言い方を見直させた。

さらに、3 つの自己表現を聞いた時の気持ちを体験的に理解させるためにペアでロールプレイをさせた。

図 3 ペアでの役割演技

図 4　全体での役割演技

その時、文章を書くことが苦手な子どもでも自分の考えた気持ちを表現できるように記述式ではなく、顔文字と気持ちを表す単語を書かせた(図 5)。

図 5　子どものワークシート

最後に、発問「これからどうしていきたいか」に対して、授業参加者の 84.6%の子どもは、感想用紙にアサーティブな自己表現を目指そうとする思いを書いた。

ウ.　道徳「わたしのいいところ」　手立て③

仲間のいいところ探しをさせて、その良さを果実の用紙に書かせた。書いた良さを相手に直接伝え合う活

動もさせた。その後、その書いた果実を、大きな木に貼らせた(図 6)。子どもたちは、まず、隣の座席の仲間のいいところを見付けた。次に、日頃、感謝の思いを伝えられないでいる仲間のいいところを見付けた。伝え合い活動では、照れながらも仲間のいいところを伝え合っていた(図 7)。

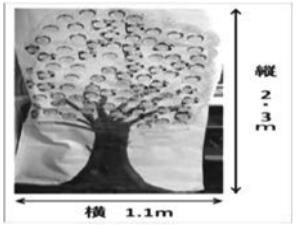

図 6 いいところ見つけの木

図 7 いいところみつけの活動(○伝え合い活動)

最後に、本時の感想を記入させた。授業参加者の 38.4%の子どもは、図 8 のような他者尊重に繋がる感想を書いた。また、授業参加者の 19.2%の子どもは、自分の良さを教えて貰って、嬉しい気持ちになったと自己尊重に繋がる感想を書いた。

今日、ええところをやってみて、やっぱりみんないいところがあるとわかりました。これから、みんなのいいところを言いたいと思いました。みんなのいいところをいってみんなを笑顔にしてあげたい。

図 8 子どものワークシート

(6) 手立ての成果(○)と課題(▲)

手立て① アサーショントレーニング

○ロールプレイを取り入れたことで自己表現を聞く側になったとき感じ方が違うことに容易に気づくことができた。

▲アサーティブな自己表現は、自分を大切にすることとどう結びついているのか理解させることができなかった。そのため、3 つの自己表現を受け取った時の気持ちだけを考えさせるのではなく、表現した時の気持ちも考えさせるべきであった。

手立て② 発問の工夫-今までの生活を振り返る-

○数日前に運動会が行われたことを生かした発問を通し、仲間に支えられていることに気付くことができた。そのため、授業参加者の 69.2%の子どもたちは、感想用紙に「これから他者に励ましの言葉を掛けたい」など仲間を尊重する気持ちを書くことができた。

▲当時の様子をなかなか想起できない子どもがいた。そのため、子どもに運動会などの写真を見せて、当時の様子を思い出しやすくするべきであった。

手立て③ いいところ見つけ

○子どもから、「みんないいところがあるとわかりました」「これから、みんなのいいところを言いたい」という言葉が自然と感想用紙に書かれていた。

○本時の感想用紙を分類した結果、自己尊重と他者尊重に関する記述を確認できた。つまり、いいところ見つけを通して、仲間の良さだけでなく、自分の良さにも気付けた(表 3)。

▲いいところを伝え合う活動では、数人の子どもたちは、相手の良さを伝えないでそのまま木に貼る姿が見られた。そのため、伝え合い活動に難しさを感じている子どもの気持ちを受け止めて、まずは、仲間の良さに気付けた事実を褒めるべきであった。

表 3 キーワードの分類結果

キーワードの分類 (例)子どものワークシートの回答例	人数 (人)
【他者尊重(仲間の良さに気付く)に関する記述】 (例)友だちの良いところを真剣に考えるといっぱいあるんだな。	14
【自己尊重(自分の良さに気付く)に関する記述】 (例)友だちに自分の良いところを見付けられて嬉しかった。	5
【授業の感想に関する記述】 (例)登場人物は、人のいいところを見付けて優しいと思った。	7

＊26 人の感想を分類した結果である。

(7) 考察 - 子ども A の変容から -

ア. 子ども A の実態-話す・聞くに課題 -

子ども A は、hyper-QU では、「学習意欲」において、学級の平均よりも高い値を示している。ある授業の言語活動では、仲間の意見を聞かない姿や自分の意見を持っていても発言する勇気が持てない姿が見られた。

そこで、自分と仲間を尊重する力を育むことを通して、言語活動において、自分の意見を話すことと仲間の意見を聞くことができるようになって欲しい。

イ. 実習 I の様子

道徳「ドッジボール」では、仲間から励ましてもらった経験を想起することができた。

道徳「わたしのいいところ」では、仲間からいいところを見付けてもらって嬉しそうな表情になっただけでなく、いいところを見付けてくれた仲間に、「ありがとう」と言った。活動の中では、仲間のいいところを 2 個見付けた。仲間から 4 個いいところを見付けてもらった。授業の感想用紙には、仲間の良さを見付けることに対して、肯定的な感想を書いた(図 9)。

僕は、この授業をやって楽しかったです。なぜかというと果実の実を貼れたのと、人のいいところを見付けられたのがいいなと思いました。

図 9 子ども A のワークシート [他者尊重(線)]

特別活動「目指せ!!話し方名人!!」では、隣の人と 3 つの自己表現を練習した。また、授業の感想用紙では、日頃の自分の言い方を見直し、感想用紙にアサーティブな自己表現を目指そうとする思いを書いた。

ウ. 実習 I 後の変容 - 話す・聞く姿 -

子ども A について、実習 I 後も継続的に観察を続けた。社会科学習で、班の仲間とお店屋さんを開く準備をする時、子ども A は、班の仲間と売る商品の値段を話し合っていた。その言語活動において、子ども A は、自分の意見を話す姿だけではなく、仲間の意見を聞き

入れ、何度も値段を書き直す姿が見られた。また、別の社会科学習の言語活動において、子どもAは、仲間の方に自分の体を向けて、自分の意見を発言していた(図10)。それだけではなく、発表している仲間の方に自分の体を向けて、仲間の意見を聞いていた(図10)。

これらのことから、自分と仲間を尊重するように働きかけたことは、言語活動において、子どもが、自分の意見を話したり、相手の意見を聞いたりする姿になる上で効果があったと考えた。

図 10　子どもAの話す･聞く姿(子どもAを〇で示す)

2.　教師力向上実習Ⅱにおける実践

(1)　実習Ⅱの概要

期間：2016年9月26日(月)～2016年10月21日(金)
学年：小学校第3学年(男15人・女11人　計26人)
授業：社会科「市の人びとのしごととわたしたちのくらし」

(2)　実習Ⅱ前の子どもの実態

実習Ⅰでは、豊かな人間関係の形成のために、子どもたち一人ひとりに自他尊重力を育成してきた。また、本学級は、「全員発言」を目標に掲げた授業が行われている。それらの実践を通して、自分の意見を話したり、相手の意見を聞いたりすることができるようになってきた。学級全体に、自他の立場や意見を尊重し、互いの考えを伝え合える雰囲気がある。そこで、実習Ⅱ前に社会科に関するアンケートを実施した(表4)。

表 4　調査観点と質問文（山口 2011 を参考に修正）

	調査観点	質問文
1	言語活動への関心	社会の授業で友だちとグループになって話し合うことが好きですか。
2	考える意欲	社会の授業で不思議に思ったことを分かるまで考える事が好きですか。
3	表現する意欲	社会の授業で自分の考えを発表することが好きですか。

その結果、社会科における言語活動への関心について、本学級の83.4%の子どもたちは、高い関心を持っていた。

しかし、社会科学習で考えることについて、本学級の49.1%の子どもたちは、肯定的な回答をしたが、残りの50.9%の子どもたちは、考えることに苦手意識を持っていることが明らかになった。

また、社会科学習で表現することについて、本学級の49.9%の子どもたちは、肯定的な回答をしたが、残りの51.1%の子どもたちは、表現することに苦手意識を持っていることが明らかになった。

【実習Ⅱの気になる子どもの姿】
実態 C　社会科学習において、自分の考えを持ち、表現することに苦手意識を持っている子ども

(3)　目指す子ども像

(2) で述べた実態があるため、実習Ⅱでは、実習Ⅰで培った人間関係を基盤に4種の手立て(言語活動)を実践する。その手立てを通し、思考力(・判断力)と表現力の習得を図る。そのような働きかけによって、子どもは、活動の中で、「わかった」「できた」などの成功感を味わうことができて、自分の考えを持ち、表現できる子どもに近づくと考える(目指す子ども像の具体的な姿はⅡ章に示す)。

【実習Ⅱにおける目指す子ども像】
自分の考えを持ち、表現できる子ども

(4)　実践の計画(14時間完了)

実習Ⅱの単元計画は以下のとおりである(表5)。

表 5　「市の人びとのしごととわたしたちのくらし」単元計画

主な学習内容	手立て
［第1次］　消費者の願いを知ろう。	
第1時　「わたしたちの身近にあるお店」 お家の人がよく買い物に行くお店について知る。	
第2時　「スーパーマーケットでの買い物」 スーパーマーケットで買い物する理由を知る。	手立て④ (たぶん)
第3～4時　「買い物体験の準備」 班ごとお店を開くために、商品の選択と値札、レジのマニュアルを作成する。	
［第2次］　販売者の工夫を知ろう。	
第5時　「買い物体験」 買い物体験をする。	手立て⑥ (クラゲチャート)
第6時　「スーパーマーケットの秘密」 買い物体験を通して疑問に感じたことを解決するために、見学の時にする質問と観察の内容を考える。	
第7～10時　「目指せ!!お店博士!!」 スーパーマーケットの見学で質問と観察をする。	
第11時　「スーパーマーケットの工夫」 見学で学習したことを振り返る。	
［第3次］　消費者と販売者の立場から考えよう。	
第12時　「お客さんと店員さん」 課題解決に向けて、既習の知識を生かし、仲間と共に解決する。	手立て⑤ (話し合い)
第13～14時　「スーパーマーケット新聞」 新聞の作成を通して、学習のまとめをする。	手立て⑦ (新聞づくり)

(5)　実践の実際

ア.　スーパーマーケットでの買い物　手立て④

子どもたちは、1週間、お家の人がよく買い物に行くお店の名前とそのお店で買った商品の種類、そのお店に行く理由を調査してきた。お家の人がよく行くお店の理由を発表するとき、ある子どもは、「『Aスーパーは、商品が安いからよく買い物に行く』と言ってい

たよ」と発言した。そこで、第1回目の予想では、「安さ」の意味を理解させるために、某店で購入した玉葱の値段を予想させた。筆者(T)と子ども(C)との対話は、以下のとおりである(図11)。

T の指示で、C は玉葱を見る前に手で玉葱の大きさを表す。 T は、某店で購入してきた大きな玉葱を見せる。 C　「大きい」 T　「この玉葱の値段は、何円だと思いますか」 C は、予想を発表するために挙手をした。 C1　「300 円くらい」 C2　「350 円」 C3　「120 円」 T　「何と、この玉葱の値段は、40 円」 C　「えー」 C は、予想とは全く違う価格の安さに呆気にとられた。

図 11　授業記録

第2回目の予想では、「お客さんの願いである『商品が何処にあるのか分かりやすくしてほしい』を叶えるためにスーパーマーケットではどんな工夫をしているのか」について予想を立てさせた。グループや全体に向けて自分の予想を発表する前に、黒板に貼られた「たぶん」というキーワードの意味を理解させた。そのことで、子どもたちは、今から考えることはあくまでも予想であると捉えた。そのため、グループや全体の意見交流では、活発に自分で考えた予想を発表していた。

イ.　買い物体験　手立て⑥

買い物体験では、お客さんと店員さん、観察者の立場を体験させた(図 12)。観察者は、お客さんが買い物しやすいように工夫している店員さんの工夫点を見付けて付箋に記録した。観察者になった子どもたちは、「大きな声で『お買い得ですよ』とお客さんを呼んでいた」「売れ切れた時は新しい商品を持ってきていた」と仲間の言動から実際のスーパーマーケットの工夫点に迫る学びを正確に記録した。その後、クラゲチャートでお客さんが買いやすいように仲間が実践した工夫を知った(図 13)。

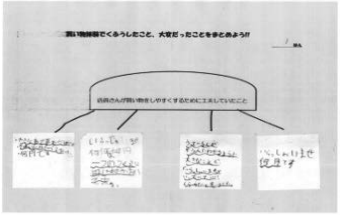

図 12　クラゲチャート

図 13　買い物体験での子どもたちの様子

ウ.　お客さんと店員さん　手立て⑤

学習課題が書かれた 10 種のカードを配布し、課題解決に向けて、仲間と協同的に話し合いをさせた。学習課題は、本単元に関連するお客さん(本学校の先生方)の願いである(図 14)。例えば、「どこで作ったのか知りたい。そんな時は、どうすればいいのか」などである。その願いを叶えるために、子どもたちは、社会科ファイルや見学記録を参考にするなど本単元で学習した知識を生かし、お客さん(本校の先生方)の願いを叶えた。また、自分の考えを持ち、仲間に伝えるなどを通して、消費者の願いと販売者の工夫が適切に関連し合っているのか確かめ合っていた。

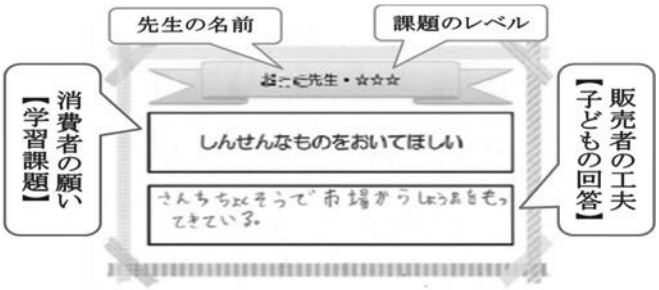

図 14　本校の先生の願いが書かれたカード

エ.　スーパーマーケット新聞　手立て⑦

パフォーマンス課題が書かれた用紙を配布し、その用紙に書かれている設問に対する自分なりの考えを新聞に書かせた(表 6)。それ以外の題名や記事の内容などは、子どもの自主性を尊重し、自由に記述させた。

表 6　パフォーマンス課題

	パフォーマンス課題の設問
1	お客さんの願いを書いて、その願いを叶えるためのミマツの工夫を書きましょう。
2	レジのくふう・商品の並び方の工夫・値札の工夫の中から1つ選んで、分かったことと、伝えたいことをわかりやすく書きましょう。
3	今までの授業の感想を書きましょう。

新聞作成の時、子どもたちは、教科書や資料集、社会科ファイルを見て、今まで学習してきたことを振り返ったり、仲間に尋ねたりして新聞を作成していた。

また、漢字に振り仮名を書いている子どもがいた。その理由を尋ねると、「1・2 年生にも読めるように書いている」と応えた。さらに、ある子どもの新聞には、綺麗に並べられた商品の絵が描かれていた。

(6)　手立ての成果(○)と課題(▲)

手立て④　たぶん

○第1回目の予想では、自分の予想よりもはるかに安い玉葱の価格に、「安さ」という言葉の意味を理解しただけでなく、予想を考える楽しさを実感できた。

○第2回目の予想では、「たぶん」というキーワードに対して、あくまでも予想であると考え、子どもたちは、積極的に自分の意見を発言することができた。

▲予想だけでは、学習として物足り無さを感じた。そのため、予想と根拠を発言させるべきであった。しかし、一度に両方を発言するように指示を出すと活動の難易度が高くなってしまう。そのため、予想を発表する活動の後に、根拠を発表する活動を実践するなど予想と根拠を分けて発言させる必要がある。

手立て⑤　話し合い

○今まで学習してきた社会的事象に関する多様な知識の中から、最も適切な消費者の願いと関連付けられる知識を自分たちで考え判断し、記述できた。

○課題を解決するために、社会科ファイルや資料集を参考にして、仲間と意欲的に考え合い・話し合う姿が見られた。

▲発表した子どもの意見だけの共有ではなくて、すべての子どもの意見を共有するべきであった。そのためには、学習の成果を机の上に置いて、子どもたちがそれを見て回る活動を取り入れるべきであった。

手立て⑥　クラゲチャート

○クラゲチャートで多様な情報を共有できたため、気が付かなかった仲間の工夫を知ることができた。

○教室に掲示したクラゲチャートを見て、子どもたちは、自分の意見が紹介されていることに気付き、表現した喜びを実感している様子であった。

▲クラゲの頭と付箋の内容との結びつきを吟味する活動をして、情報の取捨選択をさせるべきであった。

手立て⑦　新聞づくり

○子どもたちは、自分の得意な事（絵を書くことやクイズを作成すること）を生かして、読み手にも分かりやすく自分の意見を表現できた。

▲完成した新聞を廊下に掲示するだけでなく、学習の成果をより共有するために、授業の中で新聞を読み合うことなどの活動を取り入れるべきであった。

(7)　考察

ア.　パフォーマンス評価について

実習Ⅱの最後の授業で新聞づくりを実践した。その授業の中で、子どもたちにパフォーマンス課題が書かれた用紙(表 6)を配布し、新聞に書く 3 つの設問を伝えた。その中の 2 つの設問は、子どもの思考力（・判断力）と表現力の習得度を評価する設問であった。

1 つ目の設問は、項目「お客さんの願い」に、消費者の願いを叶えるために適切な販売者の工夫を記述することである〔思考力(・判断力)の習得度の測定〕。予め、教師が、消費者の願いを定めるのではなく、子ども自身が、消費者の願いを決めて、それに対する販売者の工夫を考えて記述するように指示した。

2 つ目の設問は、項目「分かったこと・伝えたい」に、今まで学んできた販売者の工夫を記述することである(表現力の習得度の測定)。

表 7 のような「成長の度合いを示す数値的な尺度(scale)と、それぞれの尺度に見られる認識や行為の特徴を示した記述語(descriptor)」から成るルーブリックを作成し、思考力(・判断力)と表現力の習得度を調査した(田中 2005)。

表 7　ルーブリック(評価基準表)

	評価内容	◎大変良い	○良い	△もう一歩
思考力(・判断力)	消費者の願いと販売者の工夫を関連付けて書くことができたか。	消費者の願いに対する販売者の工夫について、2点以上及び関連性がある意見を書くことができる。	消費者の願いに対して販売者の工夫について、1点及び関連性がある意見を書くことができる。	消費者の願いと販売者の願いを片方若しくは両方が書かれていない。
表現力	分かったこと・伝えたいことの項目に、販売者の工夫を書くことができたか。	分かったこと・伝えたいことの項目に、販売者の工夫が2点以上書くことができる。	分かったこと・伝えたいことの項目に、販売者の工夫が1点書くことができる。	分かったこと・伝えたいことの項目に、販売者の工夫が書かれていない。

イ.　思考力(・判断力)の習得に関する考察

設問①　消費者の願いと販売者の工夫を関連付け書くことができたか。

子どもたちが考えた「消費者の願い」「販売者の工夫」の解答例は以下のとおりである(表 8)。

表 8　子どもの新聞を抜粋

お客さんの願い	商品がきれいに並んであってほしい。
お店の工夫	スーパーA は、商品がきれいにならんでありました。横にならべてあったり、たてにつみあげてあったりしていました。

本学級の 80.7%の子どもたちは、「大変良い」又は「良い」と評価でき、消費者の願いに対する販売者の工夫を関連付けて書くことができた。

したがって、言語活動を取り入れたことは、子どもの思考力（・判断力）を習得させる上で効果があったと考える。

ウ.　表現力の習得に関する考察

設問②　分かったこと・伝えたいことの項目に、販売者の工夫を書くことができたか。

子どもたちが考えた「見出し」「分かったこと」「伝えたいこと」の解答例は以下のとおりである。(表 9)(波線：販売者の工夫)

表 9　子どもの新聞を抜粋

見出し	ね札の工夫
分かったこと	ね札には、ねだんや商品の名前や作った人の名前が書かれていてわかりやすい。
伝えたいこと	ね札には、商品のせつ明が書かれています。お店に行ったときには、読んでみてください。

本学級の 96.1%の子どもたちは、「大変良い」又は「良い」と評価でき、項目「分かったことと伝えたいこと」に、既習の知識を生かし、自分の意見をまとめながら読み手にもわかるように伝えることができた。

また、子どもたちの新聞を見ると、振り仮名を書いている新聞や箇条書きで説明をしている新聞など、相手が読みやすいように書くことができた。

したがって、言語活動を取り入れたことは、子どもの表現力を習得させる上で効果があったと考える。

Ⅵ　研究のまとめ

1.　総合考察

実習Ⅱ前と実習Ⅱ後の社会科に関する質問紙調査の結果の比較を以下のように示す（山口 2011 を参考に修正）（図 15・16）。

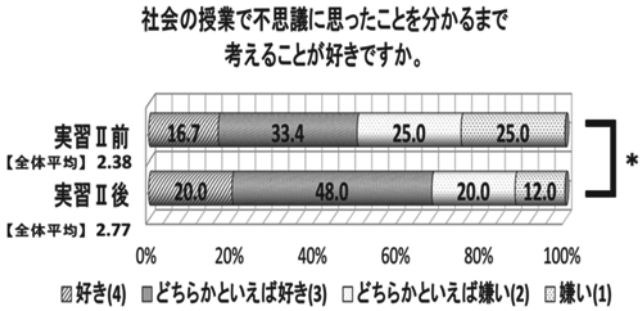

図 15　考えることへの意欲の比較［＊：p<0.05　有意差あり］

事前調査では、考えることに苦手意識を持つ子ども（「どちらかといえば嫌い」「嫌い」）の割合が減少し、考えることに肯定的な捉え方をする子ども（「好き」「どちらかといえば好き」）の割合が増加した。

また、実習Ⅱ前(2.38)と実習Ⅱ後(2.77)の全体平均を比較すると、考えることに肯定的な捉え方をする子どもの割合が増加した。

したがって、Ⅴ章の思考力（・判断力）の習得に関する考察と考えることへの意欲の調査結果から、思考力（・判断力）の習得を図ったことは、子どもの考える意欲を高める上で効果があったと考える。

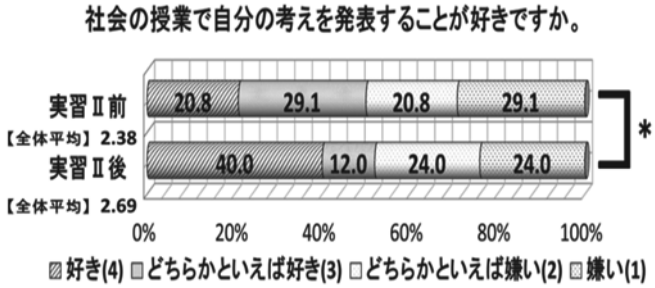

図 16　表現することへの意欲の比較［＊：p<0.05　有意差あり］

事前調査では、表現することに苦手意識を持つ子ども（「どちらかといえば嫌い」「嫌い」）の割合が減少し、肯定的な捉え方をする子ども（「好き」「どちらかといえば好き」）の割合が増加した。また、「好き」と回答した子どもの割合が 19.2%増加した。

また、実習Ⅱ前(2.38)と実習Ⅱ後(2.69)の全体平均を比較すると、表現することに肯定的な捉え方をする子どもの割合が増加した。

したがって、Ⅴ章の表現力の習得に関する考察と表現することへの意欲の調査結果から、表現力の習得を図ったことは、子どもの表現する意欲を高める上で効果があったと考える。

2.　本研究における成果（○）と課題（▲）

○自分と仲間の良さに気付く活動と自他を尊重した伝え方を理解する活動を取り入れたことは、自他尊重力の育成につながり、言語活動において、相手の意見を聞き、自分の意見を話す姿に近づいたと考えた。

○豊かな人間関係を基盤に言語活動を実践したことで、子ども同士の話し合う姿や聴き合う姿が見られ、思考力（・判断力）と表現力を習得する上で効果があったと考える。

○自分の考えを持ち、表現できる子どもを育てるためには、思考力（・判断力）・表現力の習得を図り、活動の中で、「わかった」「できた」という成功感を味わわせることが、効果的であったと考える。

▲学習課題の在り方について、本研究では、教師が、学習課題を設定した。今後は、子ども自身が、学習課題を見付け、課題解決に向けて、自ら考え判断し、表現できるような実践について追究していきたい。

▲判断力の育成について、本研究では、重点的に取り組むことができなかった。今後は、価値判断を迫る場を設け、判断基準を仲間と共に探究させることを通して、判断力を育成していきたい。

【引用文献】

・中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」文部科学省、2008
・文部科学省「小学校学習指導要領解説　社会編」東洋館、2008
・山口正「社会科の指導における思考力・判断力・表現力を育む研究-資料を活用した場面においての言語活動の充実を通して-」山梨県総合教育センター、2011
・西川純『学び合う教室』東洋館、2004
・野口芳宏『話せない子・話さない子への指導』明治図書、1994
・菊池省三『菊池省三の話し合い指導術』小学館、2015
・杉田蜂康・中村和子『わかりやすい交流分析』チーム医療、1994
・小柳しげ子・与語淑子・宮本恵『アサーティブトレーニング BOOK-I’m OK、You’re OK な人間関係のために』新水社、2009
・辰野千壽『科学的根拠で示す学習意欲を高める 12 の方法』図書文化、2009
・澤井陽介「文部科学省教科調査官が語る！【『思考力・表現力』徹底解説！】なぜ、今、『思考力・表現力か』『V プレス Vol.12』2012
・岩田一彦『社会科の授業設計』東京書籍、1995
・森分考治・片上宗二『社会科重要語句 300 の基礎知識』明治図書、2013
・文部科学省「小学校学習指導要領解説　総則編」東洋館、2008
・田中耕治『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房、2005

【付記】

大学院二年間を通して、連携協力校と施設において、多くの先生方や職員の方に温かいご指導やご助言を頂きました。とりわけ学校サポーター活動や教師力向上実習では、校長先生や指導教諭の先生をはじめ、所属学年の先生方には大変お世話になりました。お世話になった全ての先生方や職員の方に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、サポーター活動、実習Ⅰ・Ⅱ、修了報告書の作成においてご指導を頂いた川北稔先生、実習コーディネーターとしてご指導を頂いた山内雅夫先生をはじめ全ての先生方に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。